

1	前年度 評価結果の概要	・「問い」を中心とした、主体的・対話的な深い学びの実践に向けて、校内研を中心に取り組を進めた。教師や子どもの意識の変化は見られたが、学力の向上には至っていない。次年度、今年度の反省を踏まえた上で、授業改善やAI型教材を活用した基礎・基本の定着等さらに取組を進め、学力の向上を推進していく。 ・特別支援学級の児童だけではなく、困り感をもつ全ての児童に支援を行うため、本校では副担任制をとっている。複数の教員に関わることで、児童の困り感に寄り添うことができる。しかし、職員数の減少に伴い、これまでの体制を維持することが難しくなっている。次年度は、低・中・高学年団を中心に体制を作ることで、児童の困り感に寄り添っていく。 ・今年度達成度がやや不十分であった規則正しい生活習慣の確立に向け、家庭との連携という課題の克服に努めていく。家庭を巻き込んだ取組について担当者を中心に全職員で考えながら、さらに継続・発展していきたい。
---	----------------	--

2	学校教育目標	「自律」・「尊重」・「挑戦」を大切にしたい学校 ～個人と社会のwell-beingを目指して～
---	--------	--

3	本年度の重点目標	・「問い」を軸にした主体的・対話的な深い学びをめざし、校内研究や授業改善、AI型教材の活用を通して学力の向上を図る。 ・低中高学年チーム担任制による協働体制のもと、困り感をもつ全ての児童に寄り添った支援を継続・充実させるとともに教職員の資質向上を図る。 ・家庭との連携を強化し、規則正しい生活習慣の定着に向けた継続的な取組を全職員で推進する。
---	----------	---

4 重点取組内容・成果指標			中間評価		最終評価		主な担当者
(1)共通評価項目			中間評価		最終評価		
評価項目	重点取組	成果指標(数量目標)	達成度(評価)	進捗状況と見直し	達成度(評価)	実施結果	
●学力の向上	○基礎・基本の定着と思考力・判断力・表現力を高める授業の実践 ○「めあて」から子どもの主体的な学びを促す「問い」を生む指導を行う。 ○自己選択による主体的な家庭学習の実践	○児童アンケートにおいて、「問題文を解くときに、数字や大切な言葉にしろしをつけて、式の意味を問や数直線を使って友だちに伝えることができる」と答える児童を80%以上にする。 ○児童アンケートにおいて、「見通しを自分なりに問題に取り組むことができる」と答える児童を80%以上にする。 ○児童アンケートにおいて、「見通しをもって計画的に家庭学習に取り組むことができた」と答える児童を80%以上にする。	○時計算教材において、数値やキーワードに印をつけて式の意味を考えさせたり、式と図・数直線などを関連づけて問題文を解かせたりすることで、思考力の育成を図る。 【「尊重」:自他の考えを可視化し、伝え合う力(コラボレーション)を育てる。】 ○子どもが疑問をもつ(=「問い」が生まれる)ような教師の問いかけを工夫し、主体的・対話的な学びを促進する。 【「自律」:学びへの主体性と粘り強く取り組む力(グリット)を育てる。】 ○高学年の算数科において、適切な単元において、子どもの主体性を育てるために子どもが学び方を自己選択する(一斉・個別・学び合い)授業を行う。 【「挑戦」:自分の特性を考え、主体的に学ぶ力(好奇心)を育てる。】 ○子どもが学習内容・時期を選択・決定できる家庭学習の課し方を実践する。 【「自律」:「挑戦」:自分で考え(責任感)、主体的に学ぶ力(好奇心)を育てる。】				・学力向上コーディネーター ・研究主任
	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会的、倫理的な正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○児童アンケートにおいて、「楽しく(意欲的に)学校生活を送っている」と答える児童を90%以上にする。 ○児童アンケートにおいて、「自問清掃を頑張っている」と感じる児童を90%以上にする。	○人権教室では、こどもの実態に応じた話や活動を通して、自分や友だちを大切にすることの大切さを育み、自己肯定感の向上を図る。 【「挑戦」:前向きな姿勢や好奇心をもって学校生活に取り組む力を育てる。】【「尊重」:多様な価値観や意見を受け入れ、他者を尊重する力(寛容性)を育てる。】 ○自問清掃の取組を通して、自律的に行動する力、他者と協力する姿勢、思いやりの心を育てる。 【「自律」:「尊重」:公共の場を大切に、感情をコントロールする力(自制心)、責任感をもって行動する力(責任感)、仲間と協働する姿勢(コラボレーション)を育てる。】				・道徳教育担当 ・人権・阿部教育担当
	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○児童アンケートにおいて、「いじめをなくす宣言を守っている」と答える児童を90%以上にする。 ○保護者アンケートにおいて、「いじめ防止の取組に成果が見られると思う」との問いに、肯定的な評価(「そう思う」「どちらかといえばそう思う」)を90%以上にする。	○「口月の心」「Q-リテス」「教育相談週間」などを活用し、一人ひとりのこどもの実態を把握し、必要に応じた早期対応・支援につなげる。 【「尊重」:他者の人格や気持ちを大切に(寛容性)、安心・安全な人間関係を築く力(対人関係能力)を育てる。】 ○月1回の生活指導会・教育相談会を通して、こどもの様子を共有し、スクールカウンセラー(SC)やスクールソーシャルワーカー(SSW)などの専門職と連携しながら、共通理解と支援の充実を図る。 【体制を整えることで、こどもの「自律」や「尊重」の力を育み、学校全体でこどものWell-beingを高めることを目指す。】				・生活指導主任 ・教育相談担当
	●児童が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動	○児童アンケートにおいて、「先生は自分のよいところを認めてくれていると思う」と答えた児童を90%以上にする。 ○児童アンケートにおいて、「将来の夢や目標を持っている」と肯定的に答えた児童を80%以上にする。	○「がまん日記」や「褒めカード」を活用して、こどものよいところを認め合う機会を設け、自己肯定感の向上を図る。 【「尊重」:児童が自己の価値を実感し、他者との信頼関係を築く力(寛容性・対人関係能力)を育てる。】 ○総合的な学習の時間、生活科、社会科、道徳などの教科等を通して、自分の生活を振り返り、将来の夢や目標について考えたりする活動を行う。また、学校活動等において、学ぶことの意義や責任について考える話し合い、主体的な学びの姿勢を育てる。 【「挑戦」:「自律」:将来を見据え、自らの目標に向かってAARサイクルを回す力を育てる。】				・教育相談担当 ・道徳教育担当
	○創造的な特別活動の展開 ○集会等の場において、児童に自己選択・自己決定の機会を与える。	○児童アンケートにおいて、「委員会活動や係活動で自分の役割を自覚し、創造的に活動している」と答えた児童の割合を90%以上にする。 ○児童アンケートにおいて、「自分で選び、決めることは、自分の成長につながると感じている」と答えた児童の割合を80%以上にする。	○児童集会、代表委員会、委員会活動、係活動などにおいて、一人ひとりに役割をもち、こどもの思いや考えを生かした主体的な活動や自己選択・自己決定できる機会を保障する。 ○こどもが委員会活動等を通じて役割を果たす中で、生活上の諸課題の解決に向けて主体的に関わる力を育成する。 【「自律」:責任をもって行動する力(責任感)、「挑戦」:自ら工夫して取り組む意欲(好奇心)や批判的・論理的に思考する力(クリティカルシンキング)の育成を図る。】				・特別活動主任 ・児童会活動担当
	●健康・体づくり	●「望ましい生活習慣の形成」 ○児童アンケートにおいて、「睡眠時間がしっかり確保できている」と答えた児童の割合を80%以上にする。 ○児童アンケートにおいて、「毎朝朝食を食べている」と答えた児童の割合を90%以上にする。 ○運動習慣の改善や定着化 ○運動習慣の定着を図ることを目的とし、春・秋・冬には運動実施率80%以上(※高低温多湿時等を除く)にする。 ○健康委員会を中心に「スポーツ週間」を実施し、児童が楽しみながら運動に親しむ機会をつくる。	○年2回の「健康アンケート」を実施し、メディアの関与時間などの実態を把握したうえで、養護教諭と連携し、睡眠や生活リズムとの関係について適切な指導を行う。 【「自律」:健康的な生活リズムを自ら意識し(自制心)、整えていく力(グリット)の育成を図る。】 ○望ましい生活習慣や食育に関する指導を、学級活動や教科等(家庭科・保健・道徳など)と関連付けて系統的に推進する。家庭における生活習慣チェックを定期的に実施し、集計結果を学校だより等で発信することで、家庭と連携した生活改善を図る。 【「自律」:生活の基盤となる習慣を大切に(自制心・グリット)、自分の体調や学習への準備を整える力(責任感)を育てる。】 ○休み等の時間を活用し、全てのこどもが参加できるイベントを企画・実施することで、スポーツ週間への参加を促す。こどもにとって運動が楽しく、継続しやすいと感じられる環境づくりをめざす。 【「挑戦」:楽しさや達成感を通して、運動に意欲的に取り組む姿勢(好奇心)を育てる。】 【「尊重」:学年や学級を超えた交流を通して、協働する力(コラボレーション)を育てる。】				・食育担当 ・保健主事 ・体育主任
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減 ○学校組織、教職員集団としての働きやすい雰囲気づくり ○特別支援教育体制の強化と充実	○教職員一人ひとりが「自律」的に健康管理・勤務時間を意識し、教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。 ○年間20日の年次休暇のうち、教職員1人あたり14日以上を取得を目指す。 ○一人で抱え込まず、気軽に情報交換や相談ができる職場だと思おうと回答する教職員の割合を80%以上とする。 ○対象児童に対する個別的教育支援計画・指導計画の作成率・活用率(常に加算修正する)を100%とする。	○毎週金曜日を「ノー残業デー」と定め、職員室内に掲示を行い、職員同士の声かけも含めて意識づけを図る(金曜日放課後には諸会議は設定しない)。職員のWell-beingを高め、持続可能な教育環境を整備する。 【働き方の見直しと体養の確保により、教職員が意欲と活力をもって子どもたちに向き合える環境づくりを進める。】 ○配布物や調査物等のデジタル化、会議の精選や「ゴール(目的・終了時刻)」の明示を徹底し、業務全体の削減を目指す。効率化を図りながら、教育活動の質を維持・向上させる。 【教職員一人ひとりが自身の心身の健康を守り、教育活動の質と持続性を高め、こどものWell-beingにもつなげる。】 ○ストレスチェックを行い、各自の心の状態を把握する。 ○職員同士が気軽に話せる時間(金曜日の放課後の時間「ほっとタイム」18:20～16:40)を設定する。 【「尊重」:互いの立場や考えを認め合い、支え合える人間関係の構築をめざす。】 ○校内教育支援委員会を通して、対象児童への支援体制を検討し、全職員で共通理解を図る。また、校内研修を通して特別支援教育への理解を深め、支援の質の向上に努める。 【「自律」:教職員一人ひとりが自ら関わりをもち、責任ある対応(責任感)を目指す。】 ○前年度の引き継ぎをもとに、個別的教育支援計画・指導計画を適切に作成・活用しながら、児童一人ひとりに応じた支援を行う。 【「自律」:児童一人ひとりの特性や教育的ニーズを的確に把握し、個別的教育支援計画・指導計画を適切に作成・活用することで、児童の「自律」を支援する。】				・管理職 ・管理職 ・特別支援教育コーディネーター

5	総合評価・次年度への展望	
---	--------------	--